昔々のそお市（むかしむかし）

郷土を知る

社会教育課 文化財係 ☎ 099-482-5958

第10回

悲運の武将 肝付竹友の墓

戦国時代、大隅の雄であった肝付氏は薩摩の島津氏・都城の北郷氏と長らく争っていました。

元亀四年（一五七三）正月六日、志布志地頭の肝付竹友らは北郷領の末吉へ進撃し橋野に駐屯。志布志・安楽・蓬原・松山などから兵を集め国合原（住吉原）で合戦を行いました。北郷時久は都城・財部・末吉から兵を集め、子の相久・忠虎らを率いて稲井原（二之方荷原）から攻撃しました。その後、志和池・山田・野々美谷・勝岡・梶山・山之口の兵も駆けつけ、梅北地頭の知覧大和守も橋野方面から攻撃、時久は住吉山に兵を伏せ、本堂方面にも兵を送りました。四方からの包囲攻撃を受けた肝付軍は大敗しますが、これを契機に肝付氏は没落の一途を辿ることになります。

竹友は「血が谷」と呼ばれる谷（大路集落）に追い込まれ、シラスを撒いて平地に見せかけられた湿田にはまり討ち取られたと伝えられています。家臣も多く討たれその数は四百三十余名ともいわれています。

市指定文化財である「肝付竹友の墓」は、末吉町南之郷の仮屋地区（小字は竹友原）にあり、敷地内中央の舟形に地蔵が刻まれているものが竹友の墓といわれています。その右側には、約3.2メートルの大きな多層塔があり、上から一層目と二層目には四方とも梵字と家紋のようなものが四つずつ描かれ、三層目には大きく「竹友」と刻まれています。また、基礎部には「堂主　攵空」とあり、この供養塔を造った僧の名であると考えられています。

この立派な多層塔は、竹友が戦死して80年以上経過した万治二年（一六五九）に建てられていることから、地元の人々に慕われたひとかどの武将であったことが想像できます。

肝付竹友の墓

現在、志布志市松山町豊留に戦死者を祀る板碑がありますが、この辺りは戦死者の血が流れ留まった場所であったことから「ちどめ」と言われ、これが地名「豊留」の由来になったと伝えられています。